

地域を超えた連携—

埼玉県防災学習センター



▲「段ボール迷路」での参加者の様子

「段ボール迷路～BOUSAI QUIZ☆ラビリンス～」は、クイズを解きながら迷路を攻略し、防災を学ぶという内容です。子どもたちが楽しみながら防災・減災に関する知識や行動が身に付くことを目指し、2017年5月に初めて制作しました。

今回パビリオンに参加し、団体の垣根を越え防災の担い手同士が連携できたことを、大変嬉しく感じています。これからも地域・企業・自治体など様々な横のつながりを増やせる環境を作っていきたいと考えています。

埼玉県防災学習センターは、地震や火災、水害など災害時の行動を、体験を通して楽しく学習できる施設です。埼玉県にいらっしゃる際は、是非お越しください。



▲担当の吉田剛さん

埼玉県防災学習センター

TEL 048-549-2313

HP <http://saitamabousai.jp/>

※現在リニューアル工事により休館中
(2018年3月下旬オープン予定)

お知らせ

●「世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台」などの防災3行事が開催されました

11月25日からの4日間、仙台国際センター等を会場に、仙台初開催の防災に関する国際会議「世界防災フォーラム」、楽しみながら防災が学べるイベント「防災推進国民大会」、最新の防災技術を紹介する展示会「防災産業展」の3行事が同時開催されました。期間中は、国内外からの防災の専門家や市民の方など約11,000名が来場し、セッションや展示を通して、震災の経験や教訓、防災に関する知見を共有しました。

開催概要

●世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台2017 日時 11月25日(土)～28日(火)

●防災国民推進大会2017 日時 11月26日(日)～27日(月)
※仙台市主催イベントとして「せんだい防災パビリオン」を実施

●2017 防災産業展 in仙台 日時 11月26日(日)～27日(月)

●「仙台防災未来フォーラム2018 一命を守り、地域に根ざす 企業防災の取り組み」を開催します

地域企業における震災から得た経験と教訓、企業内での防災・安全対策等の取り組み、防災CSR活動に関する事例発表等を通じて、企業と地域における実践的な防災・減災活動について考えます。

日時 平成30年3月9日(金) 14:00～16:20(開場13:30)

場所 エル・パーク仙台 6階 ギャラリーホール

定員 200人【先着:3/2(金)㍻】
定員に達しない場合は当日入場も可

申込み 「仙台防災未来フォーラム2018」HP 申込みフォーム
または「お名前、ご所属、電話番号、メールアドレス」を
記入いただきFAX(022-214-8497)送信



申込フォームQRコード
(スマートフォン用)



経験をつなぎ、そして未来へ
防災環境都市・仙台

発行 仙台市まちづくり政策局防災環境都市推進室

〒980-8671 仙台市青葉区国分町3-7-1

T E L : 022-214-8098

F A X : 022-214-8497

E-mail : mac001605@city.sendai.jp

編集 株式会社仙台紙工印刷

発行日 2018年2月

コラム

やってみよう!

備える仙台

わたしの家は大丈夫? 耐震化の重要性

近い将来、首都直下地震をはじめ全国で大地震の発生が予測されています。その被害を最小限にするための方法の一つとして、住宅や建築物の耐震化が重要です。

11月に開催された、世界防災フォーラム会期中の「せんだい防災パビリオン」では、地震に弱い建物の特徴を、実験しながら楽しく学べるペーパークラフト教材「紙ぶるる」を用いたイベントを行いました。来場者は、「紙ぶるる」を自分で揺らして、どんな時に大きく揺れ、どうしたらあまり揺れなくなるのかを試しながら、耐震化への理解を深めていました。

地震から命や財産を守るため、今からできる備えとして、お住まいの住居の状況を把握し、地震対策を進めましょう。

仙台市では、毎月1回程度、建築士による木造住宅の耐震化に関する相談会(予約制)を行っているほか、耐震診断や耐震改修工事への支援を行っています。

理解することが
防災への一歩だね



▲「紙ぶるる」を組み立てる参加者

仙台市都市整備局建築指導課

TEL 022-214-8323

FAX 022-211-1918



▲プレナリセッション(世界防災フォーラム)



▲屋外展示(防災推進国民大会)

表紙インタビュー

伝える仙台

紙芝居「じしんのときの おやくそく」上演

宮城教育大学 幼児教育コース

紙芝居で伝える、子どものための防災教育。

昨年の11月26日、世界防災フォーラム(WBF)会期中における仙台市主催イベント「せんだい防災パビリオン」で、防災教育紙芝居「じしんのときのおやくそく」の読み聞かせを披露しました。会場となった国際センター駅の「青葉の風テラス」には、午前の部、午後の部あわせて150人を超えるお子さんとそのご家族が集まり、地震が起きた時に小さなお子さんがどんな風に行動したら良いかを楽しみながら学んでもらいました。私たちにとても、大変良い体験ができたと思います。

私たちは宮城教育大学の幼児教育コースで、子どもの発達と教育に関して幅広く学んでいます。今回のパビリオンへの参加は、担当教授の佐藤哲也先生へお話があり、3年生のメンバー14名の中から私たち5人が出演することになりました。上演したのは、防災専門家の知見と(株)ベネッセコーポレーション(こどもちゃれんじ)のノウハウをいかして(公財)ベネッセこども基金

が制作した保育園・幼稚園向けの紙芝居です。1ヶ月半くらい前から3年生の皆と意見を出し合い、忍者の衣装を着け、歌やダンスを取り入れるなど、子どもたちの気持ちを惹きつけ、実際に体を動かしながら災害から身を守るための行動を身につけてもらえるよう、さまざまな工夫を凝らしました。

私たちは、幼稚園や小学校の先生として教育の現場に立つことを目指していますが、その際受け持つ子どもたちは震災を体験していない世代になります。震災からまもなく7年が過ぎ、私たち自身も少しずつ危機感が薄れていると感じます。震災を知らない子ども達に、これから起こるかも知れない災害時の身の守り方や避難のしかたを楽しみながら体で覚えてもらおうと同時に、震災で私たちが経験した恐ろしさや知見を、風化させることなくしっかりと伝えていきたいと思っています。

宮城教育大学・幼児教育コース

宮城教育大学の幼児教育コースでは、幼児教育の歴史や思想、子育ての習俗等について幅広く学ぶと同時に、幼稚園や保育所などの保育現場と連携したさまざまな活動を実践している。

防災環境都市・仙台ニューズレター



「伝える」「繋げる」「備える」を応援する
防災環境都市・仙台の市民情報誌です。

仙台市では、「杜の都」の豊かな環境を活かしながら、防災力のあるまちをつくり、ひとをはぐくむ「防災環境都市づくり」を進めています。「える」では、防災・減災や環境に関わるさまざまな分野で活躍する“ひと”に注目し、その取り組みを紹介していきます。

2018 No.6

テーマ

市民の力で発信
経験と教訓

前列左から木村 ゆいさん / 松浦 小百合さん / 駒場 奈々さん
後列左から佐藤 祥佑さん / 吉田 彩菜さん



▲忍者の衣装をつけて熱演する
宮城教育大学幼児教育コースの皆さん



▲防災教育紙芝居「じしんのときのおやくそく」
((公財)ベネッセこども基金制作)



テーマ・インタビュー 繋げる仙台

いざという時の、生きる知恵。 楽しみながら学ぶ「防災」。

世界防災フォーラム会期中の「せんだい防災バビリオン」の体験型イベント「カラフル防災ランタンと防災スイーツを作ろう!」を企画・運営した女性防災リーダーネットワークのお二人に、より多くの方に「防災・減災」を身近に感じていただくため、日頃から続けている活動について伺いました。



▲「防災スイーツを作ろう!」での参加者の様子

若林区荒町連合町内会SBL
せんだい女性防災リーダーネットワーク代表

若生 彩さん(左)

仙台市社会学級研究会役員。
Wakka 地域夢つなぐ実行委員会他。

太白区西多賀連合町内会SBL
せんだい女性防災リーダーネットワーク

繁野 みど里さん(右)

西多賀北町内会副会長。
西多賀東・北地区福祉ネットさくらくらぶスタッフ他。

“楽しさ”を交えて伝える、「防災」の知恵。

——「せんだい防災バビリオン」でイベントを運営されて、いかがでしたか。

若生 「カラフル防災ランタン」は、ペットボトルと100円均一の店で売っている光る棒を使って、誰でも簡単に作れる防災グッズです。災害時用クラッカーにチョコやジャムで好きな絵を描いてもらう「防災スイーツ」作りも好評で、小さなお子さんから大人まで延べ約1,000人の方に参加いただきました。

繁野 「防災について学びましょう」と言っても皆さんなかなか取り組みにくいと思いますが、“楽しい”ことから入ってもらうとたくさんの方が喜んで参加してくれます。地域のイベントでは、アルファ米で作るおはぎ作りも人気です。身近にあるものを工夫して、楽しみながら防災・減災を学んでもらい、自分の命を守り、生き残るための知恵を家族や知人と共有し、いざという時に思い出してもらえれば嬉しいです。

たさまざまな方々とのつながりができ、そこからまた人の輪が広がっています。その仲間とのつながりを大切に、互いの強みを生かしながら、様々な切り口で防災について考えています。

学び、伝える、地道な活動の継続。

——これからどんな活動をしていきたいと思いますか。

若生 去年は仙台市主催の市民向け「仙台防災枠組講座」に参加したほか、市民カレッジ「仙台防災減災講座」を企画・運営しました。宮城学院女子大学の木村浩二先生「遺跡等から探る災害の歴史」や、人道支援の国際基準である「スフィア基準」の講座など、大変好評でした。より多くの方に防災・減災に関心を持ってもらえるよう、性別や年齢に合わせ、さまざまな催しを実施したり、情報発信をしたり、地道な活動を続けることが大切だと思います。

繁野 高齢の方や障害を持つ方のための防災対策、防災行動計画の重要性など、防災・減災に関連する分野はとても広いので、私たちも日々勉強が必要です。学んだことを地域の方々にわかりやすく伝えていくため、ネットワークのメンバーや関わりができた方々といろいろなアイデアを出し合い、工夫しながら活動しています。震災の津波で家を失い、集団移転により自宅を再建された方々のサロン運営もお手伝いしています。12月はクリスマス会を企画し、楽しい時間を過ごしました。こうした方々を見守り、元気づける活動も、ずっと続けていきたいと思っています。



▲集団移転された方々とのサロンの様子

▶ペットボトルと光る棒(サイリウム)で作る「カラフル防災ランタン」

せんだい女性防災リーダーネットワーク

「女性のための防災リーダー養成講座」修了生有志で設立。町内会役員、学校支援関係者、民生委員、防災士などが在籍し、自主研修他、講座やイベントなど、女性ならではの視点とリーダーシップを生かしながら、被災地の経験と教訓をベースとした地域の防災力を高めるさまざまな活動を行っている。

これからの人に “帰結”していくために。

「世界防災フォーラム」のセッションプログラム「『より良い復興』の実践的な取り組みと今後の方向性」にパネリストとして参加された高山さんに、毎年3月11日に荒浜で風船をリリースする活動を始めたきっかけや、セッションに登壇し伝えなかったこと、荒浜への想いとこれからの活動について伺いました。



HOPE FOR project 代表

高山 智行さん

2017年4月より震災遺構・仙台市立荒浜小学校嘱託職員。

HOPE FOR…にこめた“想い”をつなぐ活動。

——HOPE FOR projectの活動を始めたきっかけは何ですか。

震災時は荒浜近くの自宅にも津波が押し寄せたため、避難所となった七郷小学校へ。そこには約3,000人の地域の方々が避難していました。その状況下で、荒浜や七郷近辺から遠く離れて暮らすご家族やご友人がこの避難所内の安否をどうやって確認するのだろうと思い、比較的通信しやすかったTwitterで、「この避難所にいる可能性が高い方であれば、私が捜します。」と発信し、延べ100人以上の方へ安否の報告をしました。その後は、荒浜地区などで罹災した写真を回収し行政に届ける活動などもしましたが、同級生とともに、震災のあった3月11日に自分たちも何かできることをしたいという思いから、花の種を入れた風船を荒浜で飛ばす企画を考えました。風船に「HOPE FOR」の文字を入れたのは、その後にそれぞれの想いを込めてもらえるように、また、風船の中に花の種を入れたのは、落ちたところで花を咲かせるようにとの想いからです。2012年3月11日、荒浜の海岸に行くと、そこには1,700人も人が集まっていて、その方たちにも声をかけ、皆で色とりどりの風船を飛ばしました。中には涙を流す人や手を合わせる人もいて、声に出さなくとも亡くなった方や震災前の荒浜に想いを馳せた瞬間を目の当たりにしました。もう住むことはできなくても、集まれる場所や帰る場所が年に一度でもあることが大切だと思い、毎年3月11日に荒浜に集まる方たちとともに、風船をリリースする活動を続けています。

市民みんなが防災、よりよい復興を考える機会として

——WBFのセッションに参加されて、伝えなかったことは。

荒浜地区は災害危険区域に指定され、もう人が住むことは叶いませんが、昨年3月に東部沿岸部の集団移転跡地利活用方針が出され、事業者の募集も始まっています。私は、一昨年から荒浜地区に住んでいた方にヒアリングし、まとめたものを行政に届けることをしてき



▲荒浜の空を埋める、「HOPE FOR」のメッセージを入れた風船

ました。かつて住んでいた人は、そこに暮らしが続くことが当たり前で、事業をやることを望んでいたわけではありません。これからどうなって欲しいか言葉にすることはなくても、この場所に対する想いや、どうしたら今後もこの場所と関われるのかなどといった思いがある。その「声なき声」にも耳を傾けて欲しいというお話をさせていただきました。防災やよりよい復興を自分のこととして考えることが大切です。防災集団移転跡地や震災遺構もただ単に新しい建物が出来て、何かの事業やイベントが行われるだけではなく、人が人を繋ぎ、この地を訪れる人たちに、これからの人たちに帰結していくものであって欲しいです。これは市民みんなが考えるべきことだと思います。

これからの人に帰結していくために

——これから、どんな活動をしていきたいと思いますか。

私は、荒浜地区が多くの地域住民の想いを馳せる場所として、帰って来る場所であって欲しいと思っています。そして、震災当時と今では地域住民も行政も考え方が変わってきているからこそ、ここに住んでいた人たちが今どう思っているか、このまちをどんな風にしていきたいのかなど、しっかりと声を聞いて想いを残していきたいと考えています。

「荒浜小学校」は、防災・減災や津波の脅威を伝えるために震災遺構として遺されたわけですが、被災者の中には展示を見ることができないという方もいますし、小学校が遺構となったから行ってみたいと考えた人もいます。時間が必要かもしれませんが、地元の人にもちゃんと見てもらえ、外から来た人にも伝わるものにする、そのバランスを取っていくことが大事だと思っています。

「HOPE FOR project」には、今、一回り下の世代、当時、中学生や高校生だった子や、一回り上の世代の人が手伝ってくれています。3月11日に荒浜で過ごせる場所、帰ってこれる時間のために、いずれは、下の世代の子たちがそういった場づくりを担ってほしいと思っています。私自身もできることを続けていきたいですね。

HOPE FOR project

2012年3月11日、荒浜地区に訪れた1,700人の方々と花の種を入れた風船を荒浜の空へリリース。翌年以降の3月11日に同企画を実施する他、灯りのない街を灯すキャンドルナイト、かつては学び舎だった荒浜小学校の音楽室を使用しての音楽イベントを実施するなど、荒浜に暮らし続けた人々の想いを伝える活動を続けている。

HOPE FOR project 2018

2018年3月11日(日)
震災遺構仙台市立荒浜小学校にて
15:15～風船リリース(校庭)
16:00～音楽(教室内)